



**Data**

監督: プリランテ・メンドーサ  
主演: ジャクリン・ホセ/フリオ・ディアス/フェリックス・ローコー/アンディ・アイゲンマン/ジョマリ・アンヘレス/イナ・トゥアソン/クリストファ・キング/メルセデス・カブラル/マリア・イサベル・ロベス

## 👁️👁️ みどころ

近時、フィリピン映画が元気！韓国のキム・ギドク監督の後を追うかのように、カンヌ、ベルリン、ベネチアの三大国際映画祭で活躍している1960年生まれのプリランテ・メンドーサ監督に注目！そして、ドゥテルテ大統領が誕生し、混沌とした政治情勢下にある首都マニラの雑踏に注目！しかして、本作のタイトルの意味は・・・？

近時の不祥事にもかかわらず、日本では官僚組織としての警察の信用力は高いが、フィリピンのそれはハチャメチャ。その腐敗ぶりは？この賄賂の実態は一体ナニ！

「ナミヤ雑貨店」では、決して販売されていない麻薬が「ローサの雑貨店」では平気で販売されていることにもビックリだが、密告され、逮捕されると、次の密告は・・・？「地獄の沙汰も金次第」を地でいく、マニラのスラム街の実態を興味深く観察したい。ローサの熱演をみれば、こりゃ第69回カンヌ国際映画祭での主演女優賞受賞は当然！

—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*

## ■□■今、フィリピンに注目！マニラの雑踏に注目！■□■

2016年末、アメリカにドナルド・トランプ大統領が誕生したことによって、2017年夏の今、世界は激動中。それに先立つ2016年6月30日、フィリピンにロドリゴ・ドゥテルテ大統領が誕生したことによって、フィリピンも激動し始めていた。その第1は、ドゥテルテ大統領の「反米・親中国政策」の展開で、これは東南アジアの力関係に大きな変化を及ぼしている。そして第2は、選挙期間中から公約していた麻薬、薬物犯罪への厳

しい取り締まりだ。麻薬、薬物犯罪者の殺害を容認し、奨励金による告発を推進する政策の是非は・・・？

フィリピン共和国の首都はマニラ。人口約1億人の国フィリピンの首都マニラにはその約1割が住んでいるが、人口が急増する中、首都圏にはスラムが多い。本作のタイトルに登場するローサ（ジャクリン・ホセ）は、マニラのスラム街にある雑貨店の女店主の名前だ。

去る8月8日に見た『ナミヤ雑貨店の奇蹟』（07年）では、健全な品物しか売っていなかったばかりか、店主の浪矢雄治はシャッターの郵便口に投げ込まれる悩み相談の手紙に回答していたが、ローサの店では何とアイスと呼ばれる麻薬も販売していたから、ドゥテルテ政権が誕生すれば、そりゃヤバイのでは・・・？

## ■□■フィリピンの鬼オブリランテ・メンドーサ監督に注目！■□■

1960年生まれの韓国のキム・ギドク監督は、①『サマリア』（04年）（『シネマルーム7』396頁参照）で第54回ベルリン国際映画祭銀熊賞（監督賞）（2004年）を、②『うつせみ』（04年）（『シネマルーム10』318頁参照）で第61回ヴェネツィア国際映画祭銀獅子賞（監督賞）、国際映画批評家連盟賞を、また『嘆きのピエタ』（12年）（『シネマルーム31』18頁参照）で第69回ヴェネツィア国際映画祭金獅子賞（2012年）を、③『アリラン』（11年）（『シネマルーム28』206頁参照）で第64回カンヌ国際映画祭ある視点賞（2011年）を受賞した大監督だ。

それに対して、同じ1960年生まれのフィリピンのブリランテ・メンドーサ監督は、カンヌ国際映画祭監督賞の受賞を含んで、キム・ギドク監督と同じように三大国際映画祭すべてのコンペティション部門出品を果たし、キム・ギドク監督の後を追っている。そんなブリランテ・メンドーサ監督は、「第3黄金期」と呼ばれるフィリピン映画界を牽引している鬼才らしい。私は、キム・ギドク監督作品のほとんどを見ているが、ブリランテ・メンドーサ監督の作品を見るのは今回がはじめてだ。しかし、本作は？そんなブリランテ・メンドーサ監督に注目！

## ■□■肝っ玉母さん役の女優にも注目！■□■

ブリランテ・メンドーサ監督の最新作たる本作でローサ役を演じたジャクリン・ホセは、第69回カンヌ国際映画祭で、クリステン・スチュワート、シャーリーズ・セロン、イザベル・ユペールらを抑えてフィリピン初の主演女優賞を受賞したのだから、すごい。若手の美人女優でないのが残念だが、本作でのいわゆる「肝っ玉母さん」役としての存在感と演技力は抜群。

カンヌ国際映画祭の審査員の1人だったキルステン・ダンストは、本作のラストシーンに感動して涙を流したそうだが、ラストシーンでローサが食べるのは、フィリピンの屋台

名物である「フィンガーフード」の1つのキキアム（魚のすり身を揚げたもの）。これは、果物や酢を使ったソースにつけて食べるらしい。キキアムを食べながら店仕舞いをしている小さな屋台を眺める顔、そしてまた「ローサおばさん、アイスをちょうだい」と言いながら店にやってくる客を見ながら涙を流す顔は、近時の甘ったれた邦画には決してありえない圧倒的な力強さをアピールしている。

こりゃ、かつて1980年代後半にチャン・イーモー監督やチェン・カイコー監督の中国映画が世界を席卷した時の迫力と同じだ。発展途上の混沌とした状態にあるフィリピンの首都マニラを舞台として、そんな雰囲気を発散させるブリランテ・メンドーサ監督の手腕と共に、本作で主演したこの肝っ玉母さん役の女優ジャクリン・ホセにも注目！

## ■警察は信頼できる？日本では？フィリピンでは？■

今から150年前の明治維新によって近代化を進めた日本では、西洋列強の植民地とされない強力な軍事力を持った近代中央集権国家を建設するについて、対外的には徴兵制に基づく強力な軍事力を持ち、対内的には「おいこら警察」といわれる（？）強力な警察力を整備した。他方、義務教育制度を定め「読み、書き、そろばん」を始めとする教育に重点をおくと共に、議院内閣制を支える強力な公務員制度を作り上げた。その結果、近時の不祥事はともかく、公務員制度の中でも警察は最も不祥事が少なく、国民への献身度の高い公務員だと考えられてきた。

それに対して、長年スペインの統治下におかれ、1898年の米西パリ講和条約調印以降はアメリカの統治下におかれ、日本敗戦後の1946年7月4日にフィリピン共和国として独立したフィリピンの警察は・・・？その実態を、公式ホームページから引用すれば次の通りだ。

### ●警察の汚職と麻薬政策

フィリピン国家警察には長きにわたる汚職の歴史があり、同国で人権侵害的な法執行機関の最たる例が警察だと米国務省は明言している。ドゥテルテ大統領は2017年1月29日の発言で、警察組織内の40%が「芯まで腐敗している」と述べた。これまでフィリピン政府は、「麻薬戦争」殺害を調査しようとする国連の働きかけを拒んで来た。だが麻薬撲滅作戦は国外では批判を浴びているものの、フィリピン国内では幅広い支持を獲得。ドゥテルテ大統領によれば、フィリピンは「麻薬の脅威」に対処しなければ崩壊の危機にひんしていたという。

大統領就任後、最初に行った7月25日の一般教書演説において、ドゥテルテ氏は、フィリピン国内には370万人の「麻薬中毒者」がいると断言した。フィリピン最大のメディア企業であるABS-CBNは、大統領選翌日の16年5月10日～17年5月9日までの1年間で3,407件の麻薬関連死が発見され、そのうち1,897件が警察による殺人と報じている。

平均すると毎日9人の麻薬関連死者がいて、そのうち5人が警察により殺害されているという計算になる。

## ■フィリピン警察の実態は？こんな現地報告にも注目！■

ホームページに載せられている丸山ゴンザレス氏の「映画のリアリティをひもとけば、フィリピンの今が立体的に見える。」を引用すれば、こんな「フィリピン警察の実態」も…。

本作には異様なリアリティがある。マニラのスラム街を舞台に撮影したそうだが、背景のひとつひとつに見覚えがあって、思わず「アレ知ってる！」と反応したくなってしまふ。だが逆にあまりにリアル過ぎて、フィクションと思われかねないポイントがあった。ここで補足しておきたい。

まず、フィリピンの警察の雑さである。令状なしで犯人宅に押し入り、連行後は取り調べもそこそこに一気に見逃し料の話に入っている。流れるような展開で誇張しすぎと思われるかもしれないが、かなり現実に沿っているのだ。

フィリピンの警察は、市の予算で運営される。財政状況はいつもひっ迫していて、捜査にかかる予算などはほとんどない。おそらく本作に登場する警察官の月収は2～3万円とといったところだろう。そのため警察官は、幹部や署長への上納金を差引くといくら手元に残るのかを考えて見逃し料を計算しているのだ。

現場で見逃し料の請求が可能なのは、捜査のスタイルによるところが大きい。科学捜査が前提になって証拠集めをしている日本と違い、フィリピンでは監視カメラの動画と目撃証言や自供が重視される。そのため、まずは犯人を確保してしまつて、“状況”に応じて目撃者を用意するかどうかを決めるのだ。つまり、目撃者が出てこない場合にはお蔵入り、迷宮入りにできてしまう。警察の胸先三寸であることをみんな知っているから、見逃し料の支払いにも応じるというわけなのだ。

ほかにも、本作が驚くほど狭い範囲で展開されていることもリアル過ぎる。同じ場所が何度も登場してくるのは、そのことを示しているのかとも思うが、実際のドラッグ売買も隣近所を対象にした小商いであることが多い。

日本に置き換えて考えれば、商店街のタバコ屋とか駅の売店で覚せい剤を扱っているような感じである。周囲の人が知らないはずはない。そうなると、本作の邦題にある「密告」の持つ意味合いがちょっと重くなる。取引関係にある人というだけではなく、隣人を売ることになるのだ。それで助かったとしても、コミュニティのなかではその後は周囲の顔色を伺いながら生きていかなければならない。

マニラのスラム街を取材した時、犯罪に関わっている人間を探したことがある。その際に「みんな知ってても言わないよ」とか、「警察の方が知ってるよ。必要なときに逮捕したり、たかったりしていく」とかなり衝撃的な証言をされた。

実際、昨年6月にドゥテルテ大統領が就任して麻薬撲滅戦争を開始して以来、自首したい犯人と自首されたら困る警察との殺し合いが繰り返されている。

## ■□■20万ペソをつくれ！しかし、それをどうやって？■□■

本作に登場する警察官たちの姿を見ていると胸糞が悪くなってくるが、彼らのスタンスははっきりしている。つまり、「長く拘束されたり、裁判にかけられたりするの嫌なら、早く金を持ってこい。そうすれば釈放してやる。」というものだ。映画の中でこれは「保釈金」という言葉で語られているが、それは多分誤訳で、スクリーンを見ている限り弁護士の中には、逮捕や保釈の正式の手続きがとられているとは考えられない。要は、賄賂になる金ということだ。警察署のボス（かつての人気テレビ番組『太陽にほえろ！』なら、さしずめ石原裕次郎演じる、警視庁七曲警察署の捜査第一課捜査第一係のボス(?) がローサに要求したのは、20万ペソ（45万円）。

フィリピンで最低限必要な食糧費は一人当月1266ペソ（約2820円）だそうだから、ローサが「そんな金はとても用意できない」と答えたのは当然。それに対してボスは「金がないなら売人を売れ」と要求し、仕方なくローサが売人のジョマール（クリストファ・キング）を密告したことによって、ジョマールが逮捕され、ジョマールの財布から10万ペソをゲットできたから警察署のボスは大喜びだ。さらに、残りの10万ペソの算段のため、ジョマールの妻のリンダ（メルセデス・カブラル）が警察署に呼ばれたが、ジョマールは大怪我を負わされた上、リンダが準備できる金額は5万ペソだけらしい。そこで、ボスは再度ローサに対して、何ととしても残りの5万ペソを用意するよう迫ったから、アレレ……。私の判断では、警察はリンダに甘く、ローサに厳しすぎるようだが、それもこれもすべてボスの自由裁量……？

ローサと夫ネストール（フリオ・ディアス）は金を持ってくるまでは家に帰せない。そう宣言される中、ローサの長男ジャクソン（フェリックス・ローコー）、長女ラケル（アンディ・アイゲンマン）、次男カーウィン（ジョマリ・アンヘレス）、ローサの子供たちはどうやって残りの5万ペソの工面を……？

## ■□■子供たちはどうやって5万ペソを？なお不足分は？■□■

元気いっぱい働き者の「肝玉母さん」の夫は、概ね線が細く、「酒飲みで博打好きの遊び人」と相場が決まっている。ローサの夫ネストールもそのとおりだが、麻薬をやっている分、更にタチが悪い。したがって、一家がこんな危機に瀕しても彼はオロオロするばかりで、警察との交渉や対処方法を決めるのはもっぱらローサだ。しかし、ネストールもローサも身柄を警察に置いたまま子供たちが5万ペソを工面しなければならないことになると、子供たちはどうするの？

お金を借りられそうな親戚や友人については、ローサの指示に従って長女ラケルが頼みに行ったが、その結果は？面白いのは長男ジャクソン。彼の役割は家の中にあったテレビを質に入れることだが、フィリピンでは今でもテレビを抱えて質屋に持っていく方法があ

ることにビックリ！他方、多分一番大きな金額を稼いだと思われるのは、次男カーウインの怪しげなお仕事。肝っ玉母さんのローサはお世辞にも美人とは言えないし、夫のネストールもハンサムではないが、なぜかこの次男カーウインだけは映画スター並みにハンサム。これなら日本以上にLGBTが盛んな（？）フィリピンでは、いい客を見つけてタンマリ稼げそう。しかしスクリーン上には、一人の太っ腹の中年男とのデートとホテルへのチェックイン、そして男が入浴を終えた後のベッドインとお決まりのコースが登場するが、そこで偉いのはカーウインが約束の金額以上の金をゲットすることだ。半分脅迫ともとれるようなモノのいい方によって、かなりの追加料金をせしめたようだから、フィリピンのスラムで育っている若者は、したたかだと、妙に感心！

しかし、3人の子供たちが工面してきた金額は4万5000ペソ。不足する、たった5000ペソくらいは勘弁してくれるように頼んだが、警察署のボスはローサに対してはとにかく厳しい。その結果、さあ残り5000ペソの工面は・・・？

## ■□■携帯を売れば、残りの5000ペソができそう！■□■

フィリピン警察のハチャメチャな汚職ぶりは本作の当初から明らかだが、上は所長から下は使い走りのガキ（？）まで、警察組織のヒエラルキーに応じた汚職システムはすごい。ジョマールが持っていたリョックの中に予想以上の大金が入っていたことに警察官たちは大喜びで、たちまちビールと食べ物の注文が始まった。そんなどさくさの中、使い走りのガキまでが次女ジリアン（イナ・トゥアソン）の携帯をネコババしていたから、それにもビックリだ。

1度はそのことに文句をつけても「却下」されていたが、「残りの5000ペソはその携帯を売れば工面できる」と言われると、警察署のボスもそれに同意。そこで、使い走りのガキが仕方なく差し出した携帯をローサが責任をもって売却し、残り5000ペソを持ってくると約束したから、ボスもそれを許可。その結果、ローサはジリアンの携帯を質に入れるべく友人宅を訪れ5000ペソを要請したが、相手の回答は3000ペソ。そこからの交渉が見モノだから、それはあなた自身の目でしっかりと。結果的には、これにて5000ペソプラス交通費などの小銭も貸してもらえたからやっとな安心だ。

そこではじめて空腹を感じたローサは、もらった小銭で屋台のキキアムを注文しそれを食べたが、その目にはローサの店で「ローサおばさん、アイスをちょうだい」と声をかける客たちの姿が……。一方ではひたすらキキアムを食べ、他方ではそんな姿をじっと見ているローサの瞳に涙が溢れ、頬を伝わってくるラストシーンは実に素晴らしい。そんなシーンをよく見ていると、太っちょの肝っ玉母さんに見えたローサも、その素顔は意外に美人・・・？ブリランテ・メンドーサ監督のそんなラストの演出に拍手！今後もこの監督に注目していきたい。

2017（平成29）年8月21日記